

## ご協力いただいた先生方からのコメント

第1回から第3回までご協力をいただきました先生方より、本プログラムに関するご感想・ご期待がたくさん寄せられています。(登壇順)

### ◆東アジア子ども学交流プログラムに参加して

● 榊原洋一 ● お茶の水女子大学教授

今まで私には、中国は近くて遠い国という印象がありました。国際学会で北京を数回訪れた経験から得られた印象は「人が多くてダイナミックな国」といった程度のものでした。3回の交流プログラムを経験して、基本的な印象は変わりませんが、さらに加えて「教育熱心な国」という印象が加わりました。

日本は学歴社会と言われます。明治維新によつてかつての身分制度を廃棄した日本では、全ての国民が平等であり、能力さえあれば出自

に関係なくどのような職業に就くこともできます。しかし、同時に教育による格差が新たな階層を作り上げているとも言われます。

広大な国土と、多種多様な民族によつて構成されている中国の都市部では、かつての日本のような、能力による平等主義が広まりつつあるように思えました。幼児教育への強い関心も、「教育を受ければより多くの自由が享受できる」という自覚が多くの国民に共有されていることの反映のように思われます。

一人っ子政策、急激な経済発展、そして多民族による軋轢という、日本にはないダイナミックな変動の中にいる中国に、私たちが学んできたことを伝えると同時に、日本の子ども達の発達に関する重要なメッセージを得る場所として、東アジア子ども学交流プログラムから多くのことを学ぶことができたと 생각합니다。

回を追うごとに、討論の内容が深化しつつあることも実感します。来年度はどのようなテーマで行われるのか、今から楽しみにしています。

## ◆新しい時代を担う「東アジア子ども学交流プログラム」

● 多田千尋 ● 芸術教育研究所所長

「東アジア子ども学交流プログラム」に参加させていただき、新しい時代のアジアの文化交流の状況が大きく変わりつつあることを感じさせられました。

毛沢東の生まれ故郷である長沙での第1回の学術交流においては、中国での幼児教育のたくましいエネルギーと大きなうねりに触れることができたことは貴重な体験となりました。8時間もかけてバスで駆けつけた幼稚園教師をはじめ、私が日本から持ち込んだおもちゃの展示会

を食い入るように見つめる数多くの眼差しと出会い、中国が如何に子どもの教育に真剣に取り組みつつあるかを知ることができました。

また、会場となった長沙師範大学に新設された「玩具学科」の学生たちからは、10年先には中国を真の玩具産業大国にしたいという意気込みをひしひしと感じました。

同じ歴史の流れを汲み、親近感を感じざるを得ないアジア諸国が、21世紀の社会を担う人材育成という貴重な事業を、相互に手を携えて行

うことに大きな意義を感じます。そして、小林登先生を中心とした「東アジア子ども学交流プログラム」のメンバーの一員に加えていただいたことに大変感謝しております。

10年間のタイムスパンの構想であるとお聞きしています。残り7年間に、このプログラムがさらなる大きな発展を遂げることを期待しております。

## ◆変わるもの 変わらないもの 変えてはならないもの —東アジア子ども学のエンパワメントに向けて—

● 安梅勅江 ● 筑波大学大学院教授

第1回東アジア子ども学交流プログラムに参加させていただき、朱家雄先生はじめ、中国の研究者および実践の場の方々と交流することができました。その中で、変わるもの、変わらないもの、そして変えてはならないものを、皆さんと共有できたように感じました。

豊かな生活に向けて、経済環境は大きく「変わるもの」です。家族・親族とのかかわり方や、地域が刻んだ歴史・文化は民族ごとに固有であり「変わらないもの」です。子どもの最善の利益を守り、健やかな成長を促す環境を整備するという、私たち大人にとっての国境を超えた責

任は、時間を経ても「変えてはならない」普遍的なものです。東アジアの研究者、実践者、保護者と子ども、地域の人々が皆で手をつなぎ、グローバルに望ましい子育て環境を作り上げる取り組みは、まさに時宜を得たものと考えます。

その際に大切なのは、子どもたちの明日に向けたビジョンをとともに語り合い明確にすること、個人、地域、社会の力を最大限に発揮できる仕組み、すなわち「エンパワメント」する実質的な推進拠点を準備することです。

まずはさまざまな形でのコミュニケーションを継続し、相互理解を促すこと。そして一緒に

プログラムを企画し、運営する双方向の参画を実現すること。さらにそのプログラムの意義を明確にする科学的な根拠を提供すること。この3つがそろってはじめて真のエンパワメントが実現します。

本プログラムはお互いの哲学、知識、技術を共有しながら、「変わるもの」「変わらないもの」

「変えてはならないもの」について、その関係性と推移を見極めながら、今後さらに科学的な根拠を蓄積していく第一歩となりました。

このような機会を提供いただいた小林登先生はじめスタッフの皆さまに深く感謝するとともに、さらなる展開を心より楽しみにしております。

## ◆子ども学の交流の輪を他のアジア諸国にも広げてほしい

● 内田伸子 ● お茶の水女子大学副学長

2008年10月31日、11月1日に浙江師範大学杭州幼児師範学院で開催された第3回東アジア子ども学交流プログラムに参加いたしました。浙江師範大学、華東師範大学や北京師範大学の研究者、学生、浙江地方の幼児教育者の参加を得て、2日間、非常に充実したプログラムが展開されました。

まず団長のCRN所長、小林登先生より「子どもの発達の見点に立つ養育環境の構築（Child Caring Design）」の構想が披露されました。この構想を実現するためには、小児医学、心理学、社会学、工学などの学際・連携・協働が不可欠であるとの基調講演を受けて、日本と中国の研究者の学術研究の発表が行われ、CCDの実現

に向けて大人は何かができるかについて意見交換を行いました。

同時に幼児師範学院で開催された「日本グッド・トイ展」も盛況であり、附属幼稚園をはじめとして、設備の完備した幼稚園、質の高い保育を行っている幼児園ツアーもよい体験になりました。

浙江師範大学杭州幼児師範学院附属幼稚園には、教師教育のためのハーフミラーで仕切られた模擬保育室が設置されており、学生の教育に活用しているとのこと、素晴らしい試みであるとの感想をもちました。

総括のパネルディスカッションでは、保育ビデオを観て、3、4、5歳児の発達の違い、保

育者の子どもへのかかわり方の違いを観察した後、日中の研究者がそれぞれの学問分野から、保育について論評し、会場の参会者を交えた意見交換を行いました。具体的な映像は、口で説明するよりはるかに雄弁です。その映像から何を切り取ってくるかに、各研究者の関心や保育についての見識がよく表れていて、たいへん興味深いパネルディスカッションになったと思います。

保育カンファレンスのやり方として今回、杭州幼児師範学院の秦先生が準備された方法は、たいへん効果的であると思いました。今後、同じビデオを観て保育や子ども発達について意見交換するという方法を取り入れて、子どもの

発達の視点に立ったCCDの実現に向けての討論の機会を増やしていきたいと思いました。

今後は、日本と中国だけでなく、韓国やベトナムなどにも参加を呼びかけ、交流の輪を広げていけたらと願っています。

## ◆ 大きなうねりの中の東アジアの子どもたち

● 一見真理子 ● 国立教育政策研究所 総括研究官

2008年4月開催の、第2回東アジア子ども学交流プログラム（於お茶の水女子大学）に参加し、これまで自身が身をおいてきた日中の子どもをめぐる研究交流が、双方より胸襟を開いて、一層実りあるステージに入る場に入席してきた喜びを噛み締めました。シンポジウム翌日の中国側研究者の皆さんのためのスタディツアー・プログラムでも、その思いを一層強くしました。

清朝末期の中国と明治後期の日本とが幼児期において接点をもった恩物保育の原資料をお茶の水女子大学の歴史資料館で参観。当時、「近代化＝新しい国づくり」のビジョンのもとに、フレールベルの考案したこの遊具を日中の指導者たち、保育者たちはそれぞれどんな思いで導入していったのかを考えさせられました。そし

今回、実りある会議を開催できたこと、話す機会をいただきましたことに深く感謝しております。最後になりましたが、この会議の開催をサポートしてくださったベネッセコーポレーションの松澤拓也さん、ベネッセ次世代育成研

て今日のお茶の水幼稚園・いずみナーサリーでの子どもへの配慮にあふれた保育を間近にし、キッズニア・ジャパンや東京おもちゃ美術館といった新しい体験型施設をも見学することができました。今後中国での保育環境デザインの一線に従事する専門家からの嬉しいコメントやときにはあっと驚く反応は、実に興味深いものでした。同じ場においても感じるものが、目に入ると違ふ、このことは貴重です。

歴史と風土によって培われてきた大人と子どもとの関係性や、子どもたちの育つ環境そのものが同じ東アジアといっても互いに大いに異なります。今回の交流の中でもそのことが再確認できましたが、改めてそれを起点に何ができるかが問われます。

これからの子どもたちは、どこに生まれ落ち

究所の後藤憲子さん、劉愛萍さん、ベネッセ上海支社の皆様のきめ細やかなご配慮とサポートに感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

たととしても、このグローバルセッションインパクトの中で、否応なしに変動にさらされる多難な未来を乗りきっていかねければなりません。だからこそ、大人になって花開くための真に豊かな子ども時代を…ということになります。現実には生やさしくない問題が遍在します。東アジア地域の子どもたちとそれ以外の地域の子どもたちが、近い将来・遠い未来に、大きな共感をもって出合い、語り合い、手を携え合うことができるようにするためにも、子ども学交流の果たす地道な役割は、実に大きいと思います。

## ◆東アジア子ども学交流プログラムに寄せて

● 山本登志哉 ● 早稲田大学教授

第2回東アジア子ども学交流プログラムに参加させていただき、朱家雄先生はじめ、中国の研究者の皆さん、幼児教育の現場の皆さんとの意見交換を行なうことができました。往々にしてこのような交流は儀礼的なものに終わりがちなところですが、お互いの「文化の違い」を大事にしながら、改めて自分の姿を見つめ直し、そこから新しい交流の基盤を探るという性質のプログラムであると感じました。

異質なもの同士の交流というのは、大きく言って二つの基盤をもつと思います。一つはお互い同じ人間として、人類の一員として共通にもつ性質です。それはたとえば、人間の体がつ生理学的な構造、それに基づく普遍的な発達の道筋といったものの中に見い出すことができます。そのような共通の基盤をベースに、お互いにもてる知識や技術を交流させ、人類がもつ共通の問題に対して共同した対処を模索していくこととなります。

もう一つはむしろ「異質」であることそれ自体、お互いに理解しきれない存在であることそれ自体を基盤とするものです。精神をもち、文

化的に生きている私たちは、「物」としては普遍的に共有されているこの世界に、さまざまな「意味」という個人的で文化的な色彩を読み込んで生きています。私たちの幸福も不幸も、生き甲斐も、死への思いも、いずれもそういう「意味」の世界に打ち立てられていくものです。この意味の世界を他者と分かち合い、調整しあつて、私たちは日々の暮らしを送っています。その分かち合い方が個人によって異なり、そしてまたその人が生きていく社会によって大きく異なります。

そのような文化的な意味世界の差異は、いつまでもお互いに決して理解し切れないものです。それは「人と人が決してお互いに理解し尽くせない」ということ、「必ずズレを残し続ける」ということもパラレルです。だからこそ、時にそのズレと誤解によって、人々は文化によって他者を抹殺するようになってしまっています。けれども、ここで視点を変えてみると、「理解できない異質性をもち続ける」ということは、「私たちが個人としても、社会の一員としても、いつまでも多様性のある生き方をもち続けられ

る」ということを意味しています。お互いに異なる存在だからこそ、私には決してできない生き方を相手がしてくれているからこそ、両者がつながることに意味が出てくるのです。赤と赤を合わせても赤にしかならない。同じ者同士が合わさっても、同じ者しか生まれません。けれども、異質な者同士が合わさると、そこにそれまでなかったさらに豊かな意味の世界が展開していきます。

ですから、ここに「異質であること」というもう一つの交流の基盤があることとなります。朱家雄先生が強調された文化心理学の視点は、そのような「異質を基盤にした交流」という考え方にもつながっていきます。そのことをあの議論の中でお互いに確認することができたのではないかと感じることができました。このような場をご提供くださった小林登先生はじめスタッフの皆さまに、心より感謝を申し上げます。

## ◆「東アジア子ども学交流プログラム」に参加して感じたことと活動への期待

● 首藤美香子 ● 白梅学園大学准教授

地球規模で進む環境破壊、宗教対立と民族紛争による戦争の脅威、大量消費社会の浸透と情報化の加速、深刻化する少子高齢化、そして顕在化する生活格差。子どもを取り巻く社会条件は日々変容し続け、子どもを産み育てることの価値観は揺らいできている。そして、現代日本ではともすれば、大人の論理が優先されて、「子どもの存在」や「子どもらしさ」が認められにくい、「子どもが子どもらしく生きづらい社会」になってきているといえないだろうか。

私自身の子育て経験を踏まえるならば、子どもが失敗や挫折をすることを事前に回避すべく、大人の都合で安全で葛藤の少ない環境が用意され、短期間で効率よく結果を出すために必要な情報が予め選択されて提供されるなかで、子ども自身が自らの関心や興味をゆつくりと育て、「異質の他者やもの」との出会いを重ねて試行錯誤しながら、社会のなかで居場所を見つけて自己表現していくのが難しくなってきたりするように感じられる。

そうした錯綜した状況において、子どもに寄り添って、子ども自身が成長していくことを「信

じて待つ」ことができ、子どもと大人がよりよい関係を結んでいけるように媒介者となる専門家の役割は、過去のどの時代にもまして重要になってきているように思われる。「子どもが子どもらしく子ども時代を生きられる」、そんな当たり前のことが当たり前に保障される社会の実現に向けて、「子ども学」の英知を結集させていくことが、私たちに求められているといえるのではなからうか。

「子ども学」は、子どもの心身の成長発達と生活文化に関する総合的な理解を深め、特定の学問的枠組みに捉われないことなく、何よりも直接子どもの立場に立って、子どもの福利を最優先にすべく問題解明に臨むための基盤形成に尽力しなくてはならないだろう。確かに、「子ども学」は各専門の境界領域にあつて「根なし草」になる危険性も少なくないが、一方で、学際的な子ども理解に基づいた人間形成の思想と実践を創造する可能性も秘めているといえないか。「子ども学」は、「子どもの生き様」を丸ごと捉えて考えていこうとする試みであり、問題解決のための実用的なマニュアルや直接的な処

方箋を提示するものではなく、多様な選択肢を示すことで議論を活性化させ、大人と子どもの関係の新たな地平を拓くものであってほしいと願う。

「子どもの存在」や「子どもらしさ」が認められにくい、「子どもが子どもらしく生きづらい社会」において、「子どもがいる」ということと自身が現代社会に投げかける意味、子どもに対して我々が何をなすべきかによって今後の社会の行方も変わってくるということについて、この交流プログラムを通じて国内外の多様な分野の専門家の間で議論されることを期待してやまない。